

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

73

「どうすれば浮力が保てるか。浮力の元を何にするか。筏を作るにあたって出足で迷っていた。浮力の元があった。一升入りの焼酎の紙パック。栓をすれば空気が漏れない。これはいい。俺らしくていい」。六十数本の紙パックが筏の浮く力を確保させてくれそうだった。それは一年間のどろどろとお酒の量でもある。

次に紙パック群をどのようにとめるかに苦慮した。川下り途中で筏が壊れてしまっただけでオショスイ。網やシートで包み込むことを考えたが、たどり着いたのはパレット

を筏の土台にして、板と板の間に空きパックを挟み込む。不足する浮力は板をつなぎ合わせて補った。

出来上がったのは一人乗りの筏。漕ぎ易いし、スピードが出る。自慢の作である。毎年「川の駅」が主催する「気仙川イカダ下りツアー」は約十隻の筏が参加して、出発点を小坪橋上流、到着点を堂の沢橋とする約三キロのコースで行われる。

私は大会関係者ということで参加者に注意を促す先導の役割を担う。川の流れ、深さ、瀬を下るとき姿勢をそれぞれの

ポイントで指示するが、だいたいみんな何回かこける。

自分は好きで舟下りをする。好きであることが人を生き生きさせ目を輝かせ、本気にさせる。人は最終的にそこに行き

「遊び心」が築く絆

陸前高田市横田町 村上 巳喜男

着くように思う。

あらためて筏の舟下りがいいと思う。緩やかな動きでのんびりした「旅」は、心をくつろがせ、時の流れを忘れさせ、「無」の境地に誘い出してくれる。筏の上では自分が主役だ。

川面に小さかった頃の思い出が浮かぶ。胸に吸盤を持ったウシゾウカツ

近づくとつれ天候が怪しくなった。頂上付近からは海の一部が見えたが、大船渡湾であったかも知れない。昼食の時に菊池先生からいたいたいためで卵の味が懐かしい。

平成二十年四月、陸前高田市から管理委託を受けている「川の駅組合」の駅長をさせていたたいている。「川の駅」は年間

そこへはばりつくような帯状の松林、海岸とせめぎ合うように広がる緑豊かな陸地、陸地を割るように蛇行する気仙川。初めに蛇行する気仙川。初めに見るふるまこの姿であった。

中学二年の時だったと思うが、菊池貞夫先生に連れられて、同級生数人とともに五葉山に登ったことがあった。頂上部に

「講習会など。多様な行事を通じて地域固有の『宝』を大切に

する取り組みは、その土地に暮らす人々の生き方や風土を大切にすることに繋がる。過去から現在へ、そして未来へと結ぶ一つひとつの行事は、一人ひとりの「遊び心」に支えられているのかも知れない。

ゆっくり流れる筏の上からそんなことを思っ

り」講習会など。多様な行事を通じて地域固有の『宝』を大切に

みた。川は、自分の歩みを顧みさせる力を持っている。

舟下りを終えた面々の表情には達成感、満足感があり、笑いと会話、交わりが広がっている。そこにはささやかな絆の芽が生まれているような気がした。

【執筆者プロフィール】昭和二十八年生まれ。陸前高田市横田町在住。川の駅駅長

「気仙川イカダ下りツアー」にて

ニシエッセイ



のんびりした川の「旅」を満喫。「気仙川イカダ下りツアー」にて